

Title	神話的本質主義再考：「構造」と固定的イデオロギーの問題性及びその応答
Author(s)	
Citation	令和2（2020）年度学部学生による自主研究奨励事業 研究成果報告書
Issue Date	2021-04
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80633
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

令和2年度大阪大学未来基金「学部学生による自主研究奨励事業」研究成果報告書

ふりがな 氏名	なかたに ひろき 中谷 碩岐	学部 学科	人間科学部人間 科学科	学年	2年
ふりがな 共同 研究者氏名		学部 学科		学年	年
					年
					年
アドバイザー教員 氏名	檜垣 立哉	所属	人間科学研究科		
研究課題名	神話的本質主義再考 ―「構造」と固定的イデオロギーの問題性及びその応答―				
研究成果の概要	研究目的、研究計画、研究方法、研究経過、研究成果等について記述すること。必要に応じて用紙を追加してもよい。(先行する研究を引用する場合は、「阪大生のためのアカデミックライティング入門」に従い、盗作剽窃にならないように引用部分を明示し文末に参考文献リストをつけること。)				
研究目的・研究方法 <p>本研究は、副題にもある通り我々が持つイデオロギーが固定的であった場合に現実世界にどのような問題を起こすか、固定的なイデオロギーを持つことを避けるために我々はどのように振る舞えばよいのかということを明らかにすることを目的としていた。当初の研究計画では、ロラン・バルトにおける「神話」概念や、ウィトゲンシュタインの後期思想を用いて、言語の観点からイデオロギーについて検討する予定であった。しかし研究を進めるにつれ、本研究の基盤部分である「イデオロギー」概念をもう一度捉えなおす必要性を感じ、イデオロギーの表出としての言語、あるいは言表というよりも、むしろイデオロギーそのものを分析し、それを踏まえた主体の在り方を探るというやり方を経て初めて根本的に固定的イデオロギーの問題性に応答できるのではないかと考えた。その結果、イデオロギーの性質を詳細に記述しているイデオロギー論を中心的に読解することでその内部に存在する非絶対性を論じることにより重点を置くこととなり、後述する研究方法に至った。また、当初予定していた立命館大学の千葉教授の訪問は、新型コロナウイルス感染拡大の影響により断念した。</p> <p>研究方法としては、主にフランス現代思想の文献調査を中心に、適宜二次文献を参照した。詳しい内容については後述した研究成果に記すが、主にルイ・アルチュセールにおけるイデオロギー論読解とその解釈、ナチス・ドイツの具体的な事例研究を行った。その後、それらを踏まえた主体について論じるため、ジル・ドゥルーズの複数の著作の読解とその解釈を行った。また、浅田やユクスキュルらの動物論を下敷きとして、本論における主体をそれまでの部分とは異なる方向から論じた。</p>					
研究成果 <p>本研究の成果をまとめたものとして「イデオロギーの絶対的非絶対性を前提とした主体にむけて」という題目で論文を執筆した。この論文は全七章からなるものであり、紙面の制約からここに全文を記すことは出来ないが、序章を除いた六章について、以下にその概略を記す。</p>					

第一章 アルチュセールにおけるイデオロギーの諸性質

第一章では、アルチュセールにおけるイデオロギー論の読解と解釈を通じて、イデオロギー一般の性質、及びイデオロギーがある個人をイデオロギー的主体へと変化させる過程について論じた。具体的には『再生産について』収録の「イデオロギーと国家のイデオロギー諸装置」及び「生産諸関係の再生産」12章、『フロイトとラカン』収録の「言説理論に関する三つのノート」のテキスト読解を通じて、本論におけるイデオロギーの扱いを明確化した。具体的には彼のテーゼの内、特に「イデオロギーは諸個人が自らの現実的な存在諸条件に対して持つ想像的な関係を表している。」「イデオロギーは物質的存在を持つ」「あらゆるイデオロギーは、主体というカテゴリーの機能によって、具体的な諸主体としての具体的な諸個人に呼びかける」¹

の三つに着目し、第二章以降の論の土台とした。

第二章 イデオロギー・イデオロギー装置の具体例 ―ナチス・ドイツの事例―

第二章では、前章で述べたアルチュセールのイデオロギー論が現実においても妥当性を持つことを示すことを目的として、ナチス・ドイツを具体例としてイデオロギー装置とイデオロギー内面化の過程を考察した。またそれを通じて、固定的イデオロギーの問題性を具体的に述べた。

まずヒトラーが政権を奪取した前後についての資料からナチス・ドイツにおけるイデオロギー装置とその背景について、授權法とそれによって定められた諸制度、そしてプロパガンダであるとの仮説を提示した。そしてそれが実際に機能する状況について田中(2009)の資料を参照し、²それに対してアルチュセールの読解を行うことによって説明した。

第三章 イデオロギーの非絶対性 ―アルチュセールとデリダ―

第三章では、第一章において述べられ、第二章において妥当性が確認されたアルチュセールのイデオロギー論について彼自身のテキストの脱構築とデリダ的読解を通じて、イデオロギーの絶対的非絶対性を主張した。

具体的には前者の論拠として

①イデオロギーの性質は原理的に受け手の想像性に委ねられている

②イデオロギーはその実践において常に他のイデオロギーに汚染＝混交される危険性を孕んでいる

を挙げた。また、後者の論拠として記号が記号として機能する為には自らの内に必然的に差異を持たざるを得ないというデリダの「反覆可能性」概念を援用した後、東(1998)の「アルチュセールのデリダ的再読は、その呼びかけが失敗する可能性、AIE の声が目的の個人に届かず途中で行方不明になり、さらにそれが時期を逸しつつ回帰する可能性を示唆することになるだろう」³という言を引用し、イデオロギーはその伝達の過程において誤配可能性を持つことを再確認した。

第四章 イデオロギーの絶対的非絶対性を前提とした主体にむけて

第四章では、第三章において明らかとなったイデオロギーの非絶対性を前提とした主体はどのようなものであり得るかについて、ドゥルーズ『シネマ2』におけるベルクソンの再認論とドゥルーズの構造論を重ね合わせ、その帰結として動的構造を可能とする我々の振る舞いを提示した。

第一節 「シネマ2」におけるベルクソン論と、本論におけるその位置づけ

ドゥルーズは、『シネマ2』においてベルクソンは「自動的/習慣的再認」と「注意深い再認」を区

¹ ルイ・アルチュセール(西川長夫他訳)『再生産について(下) イデオロギーと国家のイデオロギー諸装置』平凡社、2010年、前から順に60,74,88頁

² 田中晶子「ヒトラー崇拜」『愛知県立大学大学院国際文化研究科論集』2009年、218頁

³ 東浩紀『存在論的、郵便的』新潮社、1998年、141頁

別している。前者において我々は対象に対して「対象運動的イメージ」を持ち、それを習慣的運動へ延長する。対して後者における「純粹に光学的なイメージ」は、行動へ延長することが出来ない。本論では『シネマ2』において述べられた再認についての諸性質から、前者はイデオロギー装置によるイデオロギーの純粹な再生産、即ち固定的イデオロギーを生み出す再認であり、後者は動的なイデオロギーを可能にする再認であると主張し、「注意深い再認」に固定的イデオロギーを脱する鍵が存在するものの、同じく『シネマ2』におけるベルクソンの再認論を扱った先行研究(國分(2013)や福尾(2018)等)においてそれは十分に探究されていなかったことを指摘した。

第二節 ドゥルーズにおける構造の諸性質と、本論におけるその位置づけ

ドゥルーズが『意味の論理学』及び「何を構造主義として認めるか」において述べている構造の定義を参照し、その中でも特に諸セリーを構造へと纏め上げるものとしての「対象 = x」に着目した。この対象 = x はシニフィエなきシニフィアン、すなわち「意味が空虚であり、それ故に、いかなる意味をも受け入れ可能で、その唯一無二の機能は、シニフィアンとシニフィエの間の懸隔を埋める」⁴ものであり、そこに異なるシニフィエを受け入れることによって構造全体を変化させることが出来ることを確認した。

第三節 注意深い再認の反覆

第三節では、「注意深い再認」における対象は、シニフィエなきシニフィアン、即ち対象 = x である。」という仮説を通じて第一節と第二節を統合することを目指した。再認の過程において、対象 = x を端的に捉えることは不可能であるということ、対象 = x が固定的なシニフィエを保持しない為に、再認は常に異なるやり方で繰り返し行われなければならないことから、イデオロギーの絶対的非絶対性を前提とした上で我々に求められる振る舞いとして「注意深い再認の反覆」を提示した。

第五章 人間 = ヒト ―構造超越性・構造拘束性についての試論―

第五章では、第四章において述べたような振る舞いを持つ主体が人間のどのような特性によって可能なのかについて生物学的視座を援用しつつ哲学的な動物性の性質と人間的性質の対比を用いて論じた。まず浅田彰が『構造と力』において対比した有機体と人間の対比を下敷きとして、動物は環世界に捕らわれ、固定的な本能 = イデオロギー以外の方法で世界と関わるが出来ないのに対し、人間は複数のやり方で世界を捉え、自らが属している構造を常に乗り越えることが出来るということを浅田、ユクスキュル、ハイデガーらを引きつつ「構造拘束性」「構造超越性」という語を用いて説明した。また、この対比について、第四章第一節におけるベルクソンの再認論の区別と類比的に捉える試みを行った。また、同じく構造からの逃走を論じるドゥルーズ = ガタリにおいて指摘されている「構造超越性」の危険性に対し、人間は「人間 = ヒト」として構造超越性と構造拘束性を同時に持っている為そのような事態を避けることが出来るのだと主張した。

終章 結論

当論文全体を振り返り、イデオロギーの諸性質とイデオロギー的主体としての我々、その具体例と問題性、イデオロギーの非絶対性、イデオロギーの基盤となる構造と、動的な構造を可能にする我々の振る舞い、そしてそれを可能にする我々の生物学的性質について述べた。結論として、我々が日常生活において行っている自動的再認と対比されるものとして「注意深い再認」を行うことによって、あるイデオロギーの構造から別の構造へと変化する契機としての対象 = x を見出すことが出来ること述べ、そして、それは既に決まっている複数の選択肢へと多岐にわたるものではなく、全く新しい構造を生み出す散種的な営みであると主張した。

⁴ ドゥルーズ(小泉訳)『意味の論理学 (上)』河出文庫、2007年、100頁

以上で当論文の概説、及び研究成果の報告を終える。

本研究の課題

以下、本研究の課題について述べる。

第一に、本研究では人間の行為を引き起こす原因として、主体が世界を捉えるやり方としてのイデオロギーを想定した。しかし、この措置には二つの問題点が存在すると考えられる。

一つに、イデオロギーは、必ずしも主体が世界を捉えるやり方ではない。ジジェクが『イデオロギーの崇高な対象』において指摘した通り、イデオロギーは信じられないことによって作動することがあり得る。本研究においては、イデオロギーのこの側面について十分に論じることが出来なかった。

次に、イデオロギーを「主体が世界を捉えるやり方」として措置し、その非絶対性を意識的な「注意深い再認の反覆」に求める本論においては、無意識の審級が全く論じられていない。今後の主体を論じる研究においては、無意識の審級を考察することが必要不可欠であると考えられる。

また、ドゥルーズは、ガタリとの共著である『アンチ・オイディプス』以降、明らかに「構造」への態度を転換する。本論における主体論は「何を構造主義として認めるか」と『意味の論理学』第6、第8セリーを中心とした構造論と『シネマ2』におけるドゥルーズの論を統合したものであるが、その間で行われたガタリとの共著が彼に大きな影響を与えた以上、その接合についてはさらなる研究が必要である。

「注意深い再認の反覆の対象 = x」が否定神学的性質を帯びないかということについて、十分な検討が出来なかった。大まかな素描をすると、「注意深い再認の反覆」によって対象 = x のシニフィエがその都度変化し、その度に構造全体を新たなものとする際に、「対象 = x」に相当するシニフィエの恣意性からその複数性を主張することで否定神学を免れていると主張することが出来ると考えられるが、これらを論じるにはハイデガー、デリダ、ラカン等を更に参照する必要があるだろう。

第五章において、動物の性質を「構造拘束性」として記述したが、ドゥルーズ＝ガタリは『カフカ』で「動物は絶対的に脱領土化を行う」と述べており、むしろ本論で言うところの「構造超越性」を持っていると述べているように思われる。これらの動物に対する態度の差異はどのような点から生じているのか、さらなる検討が必要である。また、デリダも最晩年には動物論を積極的に執筆しており、ヘーゲルを継いだコジェーヴやハイデガー、デリダ、ドゥルーズなどの動物論の類似性や相違点は、極めて興味深いテーマである。別の機会に論じたい。

本論においては取り上げることが出来なかったが、東(1998)が指摘するように、デリダと後期ウィトゲンシュタイン及びクリプキの思想には相通ずるものも多く、イデオロギー的な言説の分析においてウィトゲンシュタインの観点から解釈を行うことも可能であると考えられる。本論のテーマについて分析哲学と大陸哲学の横断的な研究も可能であるだろう。

参考文献

- ルイ・アルチュセール(石田ほか訳)『フロイトとラカン 精神分析論集』人文書院、2001 年
(西川ほか訳)『再生産について イデオロギーと国家のイデオロギー諸装置』上下巻 平凡社、2010 年
- ジャック・デリダ(高橋允昭訳)『ポジション』青土社、2008 年
(高橋哲哉ほか訳)『有限責任会社』法政大学出版局、2020 年
- ジル・ドゥルーズ(小泉訳)『意味の論理学』上下巻 河出文庫、2007 年
(宇野ほか訳)『シネマ2 時間イメージ』法政大学出版局、2006 年
(宇野ほか訳)『ドゥルーズ・コレクション1』河出文庫、2015 年
- ドゥルーズ/ガタリ(宇野ほか訳)『千のプラトー 資本主義と分裂症』上中下巻 河出文庫、2010 年
- スラヴォイ・ジジエク(鈴木訳)『イデオロギーの崇高な対象』河出書房新社、2000 年
- ユクスキュル/クリサート(日高・羽田訳)『生物から見た世界』岩波文庫、2005 年
- マルティン・ハイデガー(川原ほか訳)『形而上学の根本諸概念』創文社、1998 年
- 千葉雅也『動きすぎてはいけない ジル・ドゥルーズと生成変化の哲学』河出文庫、2017 年
- 國分功一郎『ドゥルーズの哲学原理』岩波書店、2013 年
- 浅田彰『構造と力 記号論を超えて』勁草書房、1983 年
- 東浩紀『存在論的、郵便的 ジャック・デリダについて』新潮社、1998 年
- 鹿野祐嗣『ドゥルーズ『意味の論理学』の注釈と研究 出来事、運命愛、そして永久革命』岩波書店、2020 年
- 高橋哲哉『デリダ 脱構築と正義』講談社学術文庫、2015 年
『逆光のロゴス 現代哲学のコンテクスト』未来社、2003 年
- 菊池正明『わたしたちがこの世界を信じる理由 『シネマ』からのドゥルーズ入門』河出書房新社、2019 年
- 今村仁司『アルチュセール全哲学』講談社学術文庫、2007 年
- 石川勇治『ヒトラーとナチ・ドイツ』講談社現代新書、2015 年
- 田中晶子「ヒトラー崇拜」『愛知県立大学大学院国際文化研究科論集』2009 年
- 宮崎裕介「反覆可能性の法」『東京大学教養学部哲学・科学史部会 哲学・科学史論叢第三号』2001 年
- 芳川/堀『ドゥルーズ・キーワード89 増補新版』せりか書房、2015 年
- 福尾匠『眼がスクリーンになるとき ゼロから読むドゥルーズ『シネマ』』フィルムアート社、2018 年